



「良書ご案内」

書 籍 名	人口減少社会のデザイン	著 者 名	広井 良典
出版社名	東洋経済	発行年月	2019 年 10 月

広井の著書ができれば、必ず購入する。彼の研究テーマと私の関心事に重なる部分があり、新しい出版を楽しみにしている。

社会的孤立度は、日本は先進国の中で上位に位置するといわれている。(1位日本 2位メキシコ 3位チェコ) 会社と家族が生活の中心であった男性は、定年退職後は居場所がない。定期的に行く場所として、1位図書館、2位公園とアンケートに答えているのがいかにも寂しい。

家族以外の個人と個人の本物の「つながり」がないのが、大半の男性の現状と想像できる。人と人との「つながり」は生活の質を高めてくれる。「つながり」は幸福に大きく関係する。

時間を忘れるような趣味のある人生は素晴らしい。その趣味を語り合える友がいる人生はなお幸せだ。

コミュニティという言葉を最初に真剣に考えさせてくれたのは広井だ。私(プライベート)でも公(パブリック)でもない「共」という第三の領域の持つ可能性を教えてくれた。現在厚労省が進めている「地域共生社会」という概念を広井は2009年に著書で語っている。

広井は現在の日本社会は、古い共同体(農村など)が崩れて、それに代わる新しいコミュニティができていない状況であり、大きな関係性の組み換えの時代と捉えている。

本書では多くのテーマが広井独自の視点で語られている。「人口減少社会の意味」「コミュニティとまちづくり」「社会保障」「医療・福祉社会」など。その中の「死生観の再構築」というテーマが気になった。

- ・死亡急増時代がやってくる。1950年～70年代の死亡者数は70万人、2000年に100万人を超える。2040年には170万人が亡くなると予測される。
- ・「看取り」ということが、社会の中で日常的な現象となる。
- ・「死生観」の再構築ということが日本人全体にとって大きな課題となる。

これから多くの人が亡くなる。長寿社会は死を身近に感じる時代であり、死を長く考える時代だ。現実には、大半の人は死生観が構築されていない。

本書では広井の死生観が語られているが、私には腹に落ちない内容だ。日常生活に「宗教」を持たない日本人のこれからの大きな課題となるのは間違いない。

岩城

編集後記

今年は暖冬、雪国の雪も異常に少ない。私達は近年の異常気象は何か変と感じながら過ごしています。水災害は昨年も多く、巨大化して生活環境や農業への影響など、私達を苦しめました。地球温暖化によるものと言われてしています。

地球温暖化防止、地球環境を守るためには、他人事と思わず私達日常生活において一人一人無理なくできることもあります。買い物袋は持参、ペットボトルは増やさない、リサイクルをするなど。皆さん、心掛けましょう。

発行所：株式会社ライフデザイン研究

所在地：〒550-0011大阪市西区阿波座1-13-13 西本町中央ビル10F

Tel 06-6538-8806 Fax 06-6538-8807 HP) <http://www.ldlabo.jp/index.php/> 編集人 河合

